

研究ノート

高橋信次と GLA の研究

沼田健哉

1

新新宗教と呼ばれる教団の中で、GLAは、信者が少ないにもかかわらず著名な存在である。その理由の一つとしては、初代の高橋信次が、個性豊かな教祖であることがあげられる。カリスマに関しては、すでに、「新宗教研究におけるカリスマ論」¹⁾、「現代日本における新宗教の諸相——カリスマを中心として——」²⁾において概括的考察を試みたので、以下においては、より限定した問題に関して言及することにした。

ウェーバーの定義によれば、カリスマとは、以下の如きものとされる。それは、「非日常的なものとみなされた（元来は、予言者にあっても、医術師にあっても、法の賢者にあっても、狩猟の指導者にあっても、呪術的条件にもとづくものとみなされた）、ある人物の資質をいう。この資質の故に、彼は、超自然的または超人間的または少なくとも特殊非日常的な、誰でもがもちうるとはいえないような力や性質を恵まれていると評価され、あるいは神から遣わされたものとして、あるいは模範的として、またそれ故に『指導者』として評価されることになる。」³⁾

そして、「カリスマ的支配は、支配者の人と、この人のもつ天与の資質（カ

1) 沼田健哉「新宗教研究におけるカリスマ論」『桃山学院大学社会学論集18巻1号』桃山学院大学総合研究所、1984年、29—59頁。

2) 沼田健哉「現代日本における新宗教の諸相——カリスマを中心として——」『桃山学院大学社会学論集19巻1号』桃山学院大学総合研究所、1985年、1—30頁。

3) マックス・ウェーバー世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社、1978年、70頁。

リスマ), とりわけ呪術的能力, 啓示や英雄性, 精神や弁舌の力, とに対する情緒的帰依によって成立する。永遠に新たなもの, 非日常的なるもの, 未曾有なるものと, これらのものによって情緒的に魅了されることが, この場合, 個人的帰依の源泉なのである。』⁴⁾

さらに, GLA の研究においては, 信次から長女佳子への継承が特色ある形態をとっているので, 後断者問題が重要なポイントとなる。この点に関しウェーバーは, カリスマの日常化にとって決定的なのは, 後継者問題という, 観念的および物質的理由から焦眉の急を要する問題の解決の仕方いかんであるとする。その方法には以下のようなものがある。

(一)カリスマ的資格の諸標識にしたがって「後継者を」物色することによって。

(二)神託・籤・その他の指名技術によって。

(三)カリスマ的資格をもつものを指名することによって。

(i)カリスマ保持者自身による指名, すなわち後継者指定。

(ii)カリスマ的資格をもつ使徒団または従士団による指名。

(iii)カリスマ的資格は血の中にあるという観念にもとづく「世襲カリスマ」によって。

(iv)カリスマの典礼的非人格化によって。

(v)カリスマ的正当性の原理が, 反権威主義的に解釈変えされる場合。⁵⁾

又, ウェーバーは, カリスマの「没主観化」に言及し, そこでは, カリスマは, 厳に人的な天与の資質たることをやめるとする。それは, 「あるいは(一)譲渡可能な, あるいは(二)人的に取得可能な, あるいは(三)一人の人自体に付着することなく, 人物のいかんにかかわらずある官職の保有者またはある制度的な組織に結合されるとき, 一つの資格に転化する。』⁶⁾ それらの例とし

4) マックス・ウェーバー 世良晃志郎訳『支配の社会学Ⅰ』創文社, 1965年, 47頁。

5) 『同書』52—56頁。

6) マックス・ウェーバー, 世良晃志郎訳『支配の社会学Ⅱ』創文社, 1964年, 466頁。

ては、家カリスマ、氏族カリスマ、さらには、特定の社会制度そのものが特殊な恩寵を受けているという信仰にもとづく、官職カリスマ等があげられる。

これらのウェーバーのカリスマ論を前提としつつ、以下において、高橋信次と、彼によって形成された GLA 教団ならびにその系譜をひく諸団体に関しカリスマを中心として言及することにする。

2

GLA の教祖である高橋信次は、1927年、長野県左久高原の農家に、10人兄妹の二男として生まれた。貧しい農家であったが、兄妹の中では恵まれた幼少時代をすごしたという。信次のライフヒストリーは、信次の著書以外の資料がほとんどなく、現在不明の部分が多くこれからの研究課題とされている。⁷⁾

男3人女7人の真中に生まれた信次は、10歳の時の9月に原因不明の病気にかかり、幾度か死線を越えるという体験をくり返した。それは、毎夜8時になると、定期的に呼吸が止まり、心臓が停止して五体の自由を失ってしまうというものであった。その時に信次は、いつしか“もう1人の私”となって肉体を脱け出し、自分を抱えている母と“肉体の私”の様子を見ているようになった。そのような発作を信次が続けるようになると、父は、千社詣りをしたり、信次に対し鍼灸を行なったりした。だが信次の“もう1人の私”は、家族の心配をよそに、肉体から脱けて美しい自然の生きている世界で自由に遊んでいた。信次はそこで、すでに亡くなっている人々と話をしたり、大きな建物のなかを見学したりしたが、そこには、世界中の人々が生活していた。

この病気は6ヶ月ほどで治ったが、この病気を境に信次は、家の近くにあった権現様と呼ばれる村の小さな社にお詣りするようになった。それは、健

7) 以下の信次に関する論述は、主として、高橋信次『心の発見現証篇』三宝出版株式会社、1983年、6—104頁による。

康の祈願と、“もう1人の私”とは誰であるかという疑問を解くためであった。4年、5年とお詣りは続いたが、神とは何か、祈りとは何かというような疑問は解決することはなかった。

その後信次は、平賀小学校から野沢中学に進んだが、そこで体力を鍛えるためにやった剣道は、彼の人生に大きな転換をもたらした。剣道の極意は、気・剣・体の一致であり、その修行を縁として、心身の浄化を計ることが本来の姿であることを、信次は学んだ。

その後信次は、中学を2年で中退し、軍人になるため陸軍幼年学校に入学した。そして、航空兵となり各地を転戦したが、一命はとりとめて、終戦をむかえた。信次の体内には、弾丸の破片があったという。彼が軍隊で得たものは、社会の一員としての犠牲的精神と行動であった。しかし、信次は、特定の国家思想に支配された思想による犠牲は、人生の目的や使命であるはずがないことを覚っていたとされる。

復員後、東京に田舎から上京した信次は、苦学しながら大学入試の認定試験を通過した。彼は、主として日大工学部電気学科で学んだが、一時期東大でも学んだとされる。卒論が理科的見地から霊的現象を解明しようというものであったため、教授の不評を買い、卒業資格を得ることができなかったようである。さらに信次は、電気工学の外にも、物理・天文・医学・化学等を学び、それが後の教理の形成に大きく関係している。

事業の方に関して言えば、25歳のとき、電気関係の仕事をするため、小さな工場を借りて、独立自営の第一歩をふみ出した。その後、徐々に企業として拡大していき、やがて、コンピューター端末機器を製造する高電工業株式会社を設立し、同社および、八起ビル管理株式会社の社長を兼ねるに至った。

信次は、宗教書を読もうという気持はなかったが、神秘の世界に関しては、探求をやめず、眼で見たり聞いたりするのが道楽であった。禅定して瞑想に耽ってみたり、坊さんにいろいろ質問したり、キリスト教会の門を友人とともに叩いて、その説教を聞いたりした。しかし、いずれも納得がいかず、信

次は、しだいに既成宗教に失望していった。

彼は、学友に「変わり者の予言者」などと呼ばれ、異常者扱いをされたという。1954年12月に信次は結婚したが、この前後から不思議な現象が始まり、予言はほとんど適中し、相談にくる人が多数いた。

そして、1968年2月3日、ローソクの炎が大きくなり、ついでそれが蓮の華に変化し、最後は蓮の実の形に変わることがあった。

ついで、7月3日、義弟の心を調和して、光を手のひらから送っていると、義弟の口から昔の侍の声が出てきて語り出した。その後、義弟を通じて霊的現象が生じ、ついに、「ワン・ツー・スリー」と名乗る指導霊と、「フワン・シン・フワイ・シンフォー」という守護霊が現われた。この守護霊は、信次に対し、3日のうちに悟れという要求をした。信次は、高野山の修行僧や上野の寛永寺の古宇田老師と接し、さらに下総の中山寺にまでいった。そして、謙虚で執着を捨てた心、さらには悪を善に変える慈悲の心になった信次は、一種の悟りに達し、自信を持つにいたった。

その後7月末まで義弟を通して行なわれていた次元の異なった世界からの通信は送られなくなり、信次に対する教えは、守護霊や指導霊達から直接行なわれるようになった。

9月18日には、妹に観世音菩薩が入り、その後、転生輪廻の過去世を思いだすにいたった。これらの現象を通じて、信次が抱いてきた“もう1人の私”の謎は、肉体から抜け出した自分自身で、あの世に帰るときの、新しい肉体（光子体）を持った私であるとして解明された。心の曇りがなく調和されているとき、信次の身体の周囲は、光によって満たされ、ドームのような光明が、次元の異なった世界まで通じるように感じられた。信次は心を調和させれば、世界中の见たいと思う場所に肉体から抜け出して行くことができた。

ついで、妻にも同様の霊的現象が生じ、心の曇りが反省的瞑想によりぬぐい去られるに従って、神の子として心の窓が開かれて行くことが分かった。

やがて、この話が外部に洩れ、多くの来訪者があるようになった。そして、

1968年10月頃には、毎土曜日、6, 70人の人々が興味からかもしくは神理（絶対の理、神の理）を求めようという目的から集まってきた。

1968年11月24日に、信次は、霊界で現代と古代の人が入り乱れたような万国の人の前で1時間半ほど講演をしたと言う。その後、信次や妻、妹は、毎夜のように指導霊や守護霊の教えを受け、いろいろの事を学んでいった。

1969年4月には、毎土曜日、100人近くの人が集まるようになったので、浅草に建設中のビルの三階のフロアを開放することにした。

4月8日に「大宇宙神光会」を発足させ、第1回講演会を行なった。

1970年12月2日には、会名を GLA と変更した。これは、God Light Association の略である。1973年には宗教法人となり、霊友会から分派した「瑞法会教団」が帰依し関西本部となった。

その後、他教団の幹部の参入もあったりして、教勢は順調に拡大したが、1976年に至って信次の健康が悪化するにいたった。3月の白浜の研修会において、信次は、自己をエル・ランティーであるとし、長女佳子の位置づけを示唆した。その時のビデオを見ると、講師達に別れを告げているようであり、自己の死期を覚っていたように思われる。その後、東京本部主催の青年研修会、東北講演会に参加した後、6月25日信次は死去した。

信次は以前から、48歳の時生命にかかわる事があると予告していたが、そのあまりに急激な夭折は、会員に動揺をもたらした。しかし、それは、肉体を脱ぎすててあの世へ帰り、あの世からソ連の指導者が原爆の発射ボタンを押さないようにするため等の説明により克服された。

その後、妻であった一栄が会長となり、日大文学部哲学科在学中の長女佳子を「法の後継者」とし、「ミカエル」として伝導活動を行なったが、会内部に混乱が生じた。

信次は、よく宗教で生計をたてることを戒めたとされるが、その死後会のイニシエアティヴをめぐって、講師の対立が生じ、結果としては、主として若手の講師が残り、多数の年輩の講師が、GLA を脱会するに至った。若手

講師は、「ミカエル・ウィングス」なるものを形成し、SF作家の平井和正が、スタッフとして参加した。彼らは、ミカエルの親衛隊的組織 MBG を形成させ、全国にミカエル旋風を起こそうと試みた。

生き神・生き仏であるというような主張は、マスコミに対して行なわないのが、新宗教教団における常識であり、GLA のミカエル宣言は、十分な成功をおさめるに至らず、その後、ミカエルであるという主張は対外的には顕在化せずに現在に至っている。

GLA から脱会した中で、大きな集団を形成するものとしては、園頭広周を代表者とする正法会、GLA 関西本部、堀田和成を代表とする偕和會等があげられ、それぞれ1,000名以上の会員を有している。それ以外にも千乃裕子を中心とするグループがあり、多くの著書を出版している。さらに信次の本を集まって勉強する小さなグループは多数ありその総体は把握できないのが現状である。

GLA 総合本部は、現在会員公称1万4,000人であり小規模の教団にとどまっているが、会員を増やそうという積極的姿勢はあまりみられない。最近の GLA 誌などを読むと、倫理的色彩が強く、宗教的色彩が以前より希薄である。又、マスコミに対し強い警戒を示している。信次に関しては、霊能者としての側面より法を説く面が強調され、さらに、佳子が前面に押出されていると言える。そして、会員に対するきめ細かい指導を行なう努力をしているようである。

3

高橋信次によって形成された GLA の教義は、他の教団にはない独自性を有している。信次を理解するに際しては、彼が理科系出身の企業経営者であることをまず考慮すべきである。最初の著書である『大自然の波動と生命』⁸⁾をみると、全体が、「生命論」、「物質論」、「現象論」の3編より構成されて

8) 高橋信次『大自然の波動と生命』第十五興生社出版部、1969年。

おり、理科系よりの内容である。信次独自の運命論が展開されているが、易者や占い師が利用したこともあって、後に絶版にされた。ついで、初期の著書としては、『天使の再来』⁹⁾ があげられるが、この本において、信次の教説はほぼ出そろっている。しかし、信次の主著は、『心の発見』3部作と『心の原点』であると言える。『心の発見』では、自己のライフヒストリーにふれた後に、時として体験をまじえて論を展開している。以下、信次の著書によりつつ、その教説に言及したい。¹⁰⁾

まず彼は、人間の地上における目的は、各人の心の調和と、地上の楽園、仏国土、ユートピアの建設にあるとする。それも、人間自身が神仏の子であるからである。人間の歴史は、2億年前にさかのぼり、その時人類はすべて他の天体から、この地上に降り立った。当時の人びとは調和がとれ、地上は仏国土そのままで、人びとの年齢は五百歳、千歳を保ち、年もとらずに、あの世とこの世を自由に、行ったり来たりしていた。その当時には原罪はなかった。しかし、しだいに地上の生活になれた人類は、あの世との交通が途絶え、五官、六根に振り回され、罪をつくりはじめた。かくて、人間の目的は、心の調和、神仏の心に帰る修行と、2億年前の仏国土、神の国を再びつくることとなった。

人間は、本体を中心に、5人の分身から成り立っており、その構成は以下の通りである。(一)本体が男性で、分身が5人男性 (二)本体が女性で、分身が5人女性 (三)本体が女性で、分身が2名女性、3名が男性 (四)本体が男性で、分身が2名男性、3名が女性

地球上の人類は、こうした生命を受けて、広大な宇宙体の調和を計るためと、魂を磨く目的を持って、その環境に適応した魂の乗り舟である肉体に乗って転生輪廻し続けている。

人間の精神構造は、心を含めて90%の潜在意識、想念帯、10%の表面意識

9) 高橋信次編著『天使の再来—現代にも生きている宇宙の神理』八起光書房、1972年。
10) 以下の論述は主として『心の発見』三部作による。

からなる。想念帯は、潜在意識と表面意識がまざり合った世界であり、ここには、各人の過去世、前世、あの世での生活の記録と、現象界、つまり後天的経験のすべてが記録されている。

霊道が開いたということは、天使の光が、人の意識に入ったということであり、同時に、内からの光が外に出たことを意味する。想念帯に窓が開く場合の典型が霊道である。それを普通は霊能というが、霊能が開くと、いろいろなことが分かり、超能力が身につく。しかし、霊能にも短所があり、表面意識の作用と想念帯の振動で、本人に欲が生じ、威張ったり、おごる気持や金儲けの手段に使うと、危険なものとなる。守護霊は、その人から離れる際に、その想念帯の開いた部分をふさぐが、そのすきに、動物霊や魔王が入ってくる。おごる気持は、こうした動物霊や魔王と同通し、その人の意識が、これらを引き込む。これらのことから、霊能そのものは、悟りへの一過程にすぎないことが分かる。

ところで、実在界（あの世）は、表面意識90%、潜在意識10%で、現象界（この世）は、表面意識10%、潜在意識90%となっている。

現象界、この世は、善と悪、調和と不調和の諸現象が同居している社会である。これに対し、あの世、実在界は、天上界、地獄界に大別されて、善悪がはっきりと区分されている。その世界の区分は、以下のようになっている。

1. 如来界（上段階光の大指導霊）

この世界は、心の調和度によって、神仏と表裏一体、この現象界と実在界の支配者の世界で、“光明の世界”という。釈迦・イエス・モーゼすなわちアガチャー系グループといわれている上段階光の大指導霊の世界で、仏教的には、金剛界とも如来界ともいわれている。これらは、大宇宙即一体の心を持ち、すべてにこだわりのない、万象大調和を根本とした社会を造り、この世とあの世を支配している。

2. 菩薩界（上段階光の指導霊）

ここでは、如来界とほとんど変わらない社会生活が営まれている。指導霊

達は、現象界と実在界の指導とともに、自分自身もまた生活の中で修行をしている。

3. 神界（光の天使）

さらに一段低い霊域の世界であり、哲学者・学者・科学者のように、智で悟って実在界に帰った天使達が生活している。この現象界で肉体舟に乗って修行している人々の、研究努力に協力している光の天使達の世界である。

4. 霊界

芸能関係や、スポーツ関係、または思想的な小集団にいた住人達の非常に多い世界である。人類は皆兄弟というような一つの世界に進展されているところで、幽界より精妙化され、霊域が高い。また、生命の分身や本体が現象界へ出ている場合は守護霊ともなる。霊界には、幽界より進化してきた生命も多く、あの世では、霊界人と幽界人の数が最も多い。

5. 幽界

一般に天上界の入口より上下の段階が、霊の調和度によって造り出された世界である。この現象界と同様に、自分自身が望んだ人々の集団による各国が存在しており、現世と異なるところは、戦争のない調和された社会組織になっており、経済はバーター制（物々交換）をとっている。各自が己自身に足ることを良く悟っているが、未だ人間社会の匂いがする。この世界からも、肉体修行の目的で現象界に生まれてくる者は多い。それは、この現象界が、各世界を通じて最も大変な修行場であるため、自分達の世界の霊域を高めようと、幽界人達が肉体修行を申請するからである。

6. 地獄界

人生航路における修行結果の、不調和の想念に比例した世界として存在している。この現象界において、正しい人々を恨んだり、そしったり、常に心の安らぎのない人々が、この世を去るまでその意識を持ち続けると、その地獄で、悟るまで修行をしなくてはならない。

この現象界の心の指導者は、アガチャー系グループにより構成されており、

彼らは、実在界と現象界の支配者であり、大指導者である。

ゴードマ・シッターダー、イエス・キリスト、モーゼは、上上段階光の大指導霊である。さらに、423人の上段階光の大指導霊（如来）、2万人近くの上段階光の指導霊（菩薩）、1億数千万人の光の天使が実在界におり、霊界、幽界の上段階天使達は更に相当数におよび、秩序正しい生活を送っている。

この天使達により、地球上の環境は守護されており、信次のような霊能者は、彼らと話をするこゝも、姿を霊視で見ることゝできる。なお、神罰・仏罰を与えるというやうな神仏を信じてはならない。なぜなら本物の神仏や光の天使達は、絶対に人間に罰を与えるというやうなことはしない。罰は、自分自身の不調和な想念と行為が造り出したものであつて、その原因はすべて自分自身にある。光の天使達は、霊能者の心の調和度に比例して力を出すことができる。したがつて、霊能者は、神理を悟り、毎日の生活自体を正しく生きるやうに勤めることが必要である。

それぞれの人間には、守護霊と指導霊がついている。守護霊とは、魂の兄弟（人間の生命は本体1人、分身5人から成る）の1人で、ほとんど専属的について守っている霊である。したがつて、ある人の生活史を調べようとするなら、その人の守護霊から聞けばわかる。しかし、聞きだす者の意識が相手方より低いと、それは不可能になる。あの世の意識界は、自分の意識より下位の者の意識は見えても、上位の意識をのぞくことはできないからである。

指導霊は、主として、その人の職業なり、現象界の目的使命に対して、その方向を誤らないやう示唆を与えてくれる魂の友人あるいは先輩である。たとえば、医者として過去世に経験のない者が今世で医者となつた場合、その人の心の調和度により、より高級な指導霊がついて示唆を与えてくれる。このやうに、現象界の人間にとって、いちばん身近にいる魂の兄弟たちに、常に感謝し、「祈り」という調和された想念と行為を怠らないならば、その人の一生は、真に、安らぎのあるものとなる。反対に不調和だと、守護霊はその人を守ることができず、これが長期にわたると不幸を招くことになる。

宗教的に“行”をするという、滝に打たれたり、山中で肉体行をする、とだと思っている人が多い。ところが本当は、人間らしく生活する中で魂の修行を行なうことが使命なのである。煩惱は、心の中に芽生えるもので、不調和な想いや、行為に打ち克つことのできる生活が本当の修行である。

神仏と人間の関係は、大宇宙体は、神仏の体であり、神仏の意識は大宇宙体を支配している。私達の生活地域も、大宇宙体の小さな細胞である。考えることや、いろいろの心の働きの一切は想念であり、意識の意志の働きである。この意識こそ、大宇宙体を支配している意識、すなわち神仏に通じているものであり、私達の心は、神仏の子として、その仏性神性を持っている。私達の意識、すなわち魂と肉体舟は、霊子線ともいうべき魂の緒によって結ばれている。したがって、肉体舟が健全な間は、必ず霊子線によって魂と接続されており、そのゆえに、あの世へもこの世へも自由に行けるのである。

そして、信次は、仏教もキリスト教も、今こそゴータマやイエスの教えの当時に帰ることが必要であるとする。仏教もキリスト教も、本来の姿を変えられ、日々の生活に溶けこんでいるが、あまりにも形式化され、行事化されている。特に仏教は、智と意による解釈にかたより、情、すなわち“心”が失われている。

私達も、形式化した行事の中に埋もれ、心の故郷を失っている。現代社会の歪みは、物質経済至上主義に陥り、人々の心、個々の支配者である仏性、すなわち神性を忘れ去っているところにある。人間の人生航路の正しい進路こそ正法なのであり、ゴータマやイエスの時代に説かれた心の在り方、本来の人間の存り方に帰ることなのである。己自身が一切の苦しみから解放され、正法を実践することによって心の受け入れ態勢が整えば、過去世で学んだ無限大の智慧を悟り、調和のとれた安らぎの世界を、己の中に再現させ得るのである。

イエスも釈迦も一般の子供と同様に育てられ、ただその環境や現象に無常を感じ、苦悩の中から悟っていったのであり、これは人間のすべてがそうし

なければならない現象界の定めなのである。

あの世とこの世の事柄は、信次達のような霊道者が、神理を悟り、日々の生活と安らぎを得て、潜在意識の調和度、すなわち表面意識と潜在意識のダイヤルが一致して、神仏に通じる心の扉が開かれたため、解明することができたのである。

彼らは、イエスがナザレの丘やヨルダン川で神理を説き、ゴータマが説法をした時のように、神殿や仏殿などは一つも祀っていない。心の中に大神殿、大仏殿を持っているから祀る必要もないし、どこでも即座に霊的現象を出し得るから、偶像崇拜的な場所などは必要ない。又、従来の新興宗教の行事のようにお経を上げたり、祭祀をしたりする必要もなく、いかめしいものではない。

イエスの教えも、ゴータマの教えも、神理は一つである。ともに光の天使であり、人間としての心の存り方を教えていることは変わらない。我々は、正道、すなわち人間として中道の生活を営むことによって自分自身の価値を知ることが可能である。それにより、私達は心がいかに広大でそれぞれが、神仏の子としていかに偉大であるかを悟ることができる。自己中心の愚かさを悟り、人間は一人ではないと考えたとき、人は安らぎのある調和された者になることができ、嘘のない生活が確立される。

人間の価値を忘れて不調和な人生を送っている人々は、心の安らぎがなく、暗い想念に覆われている。だから、幸福をつかむ近道は、過去世で犯した業をしっかりと確認して、過誤のない人生を送ることであり、そのためには、常に反省する心を持って、自分の悪しき性格に打ち克つ必要がある。反省の冥想とは、心を浄化し神仏の光によって覆われることである。これに対し、欲望を満たすための信仰は、祈れば祈るほど心が不調和となり、不幸な人生を送るようになる。神理に適った“八正道”の実践によって調和した正しい想念と行為、神仏の子たる自覚を持って衣食住に足ることを知った生活こそ幸福への道である。

我々は、輪廻転生している生命であり、神仏の命によって魂の修行をし、この現象界に、調和のとれた仏国土を築く使命を持って生まれてきた。我々も循環の方式どおり、いつか老朽化した肉体と別れ、新しい光子体という乗り船により実在界に帰らなくてはならない。生老病死という苦しみについては、八正道という神理を悟り、毎日の生活実践によって解決をすることができる。

神理を悟って生活している人々の中から生じる霊能者は、観自在力を得、正法の証明者として活躍している。彼らが霊的現象を現わすことが可能なのは、心が調和されていることにより、守護、指導霊が教えるためである。我々は、生まれによってではなく、神理に即した心を持って、日々の生活行為をするかしないかで、聖者にも非聖者にもなる。霊道者の身辺では、過去世の言葉で、転生輪廻の事実が歴史的に、普通の会話で語られている。異言に関しては、新約聖書の使徒行伝第二章に同じ現象がでている。転生輪廻については、仏教でも証明されている。華嚴經十地品の中に、日々の生活修行の中で心を調和させることにより、神理を悟り、自分の輪廻転生の過去を知ることができる、と記されている。

ついで悪霊に関しては、以下のような言及がみられる。人間は、死の恐ろしさから肉体という魂の乗り舟に未練と執着を持つ。そのような現象界への執念が、地縛霊・浮遊霊などになって人間に不調和な現象を起こす。地縛霊は、交通事故現場、不慮の死を遂げた場所、自殺現場、戦死箇所、先祖伝来の執念、不調和なものを祀ってある場所等に生活していることがある。彼らの土地に対する執念に対して、彼らの住む正しい場所、あの世の教え、神理を説いてやるが必要になる。現象界での状態と同じ意識を持ってこの世を去ったものは、生と死の間がはっきりとしない。彼らに対しては、反省する方法を教えて、心の曇りが晴れるようにすれば、即座に神の光によって覆われるため、自ら悟るきっかけとなる。

憑依霊とは、地獄に堕ちた霊がその環境に耐えきれず、この現象界で生活

をしている不調和な想念を持っている意識に憑依しているものである。彼らは、人々の意識の調和度によって肉体から出ている後光（オーラー）の暗い箇所に住所を決めて憑依し、その部分が病気になっている。病気の80%近くは憑依霊の仕業とされる。こうした憑依霊を除くには、その霊に対して、憑依が悪であることを良く説得するとともに、憑依されている者も自ら正法に適った生活や心の持ち方を実践する以外に道はない。たとえ憑依霊を除いても、本人が正法に適わないなら、再び悪霊を呼びこんでしまう。

又、先祖との関係は、こうして肉体が与えられ、現象界に存するというのも、もとをただせば先祖の、たゆまざる調和への努力の結果とする。したがって、先祖にたいして心から感謝するのは人間として当然の義務である。しかし、先祖に対する供養は、お経をあげることではない。死者の霊にもこの世にいた時と同じように、普通の言葉で、人間としての正しいあり方を語って聞かせるのがよい。死者・先祖の最大の供養とは、地上界の子孫の実生活の調和である。

易、占いに関しては、それは正法（正しい秩序、正しい法）とは、まったく関係がないとする。易、占いは、当たりはずれがあり、それ自体がその限界を示している。さらに、人の目的は魂の修行にあり、生年月日、占いで悪いという結果がでていても、必要があればあえて決行しなければならないこともあるわけである。¹¹⁾

4

高橋信次は、みずから神仏であると名のる者を信じてはならないと言っている。そのためもあってか、死の直前まで、自分の存在についてはっきりと言及したことはなかった。しかし、多くの信者は、彼を釈迦の再誕とみなしていた。その一例としてあげると、信次の弟子の一人であった園頭広周は、信次によって霊道を開かれた時のことを以下のように記している。「私は高

11) 高橋信次『心の指針』三宝出版株式会社、1983年、183—185頁。

橋先生に向かって『ブッダ』と叫んでいた。あのなつかしさ、そのなつかしさ、このなつかしさに涙がとめどもなく流れてくる。その私の眼にはっきり見えるのは、『お釈迦さま』であった。『ブッダ……ブッダ……』。そう呼びながら、私はひれ伏していた。『そなたは二千五百年ぶりの約束をよく果たしてくれました。今生でも、あのインドの時と同じように正しい法を伝えて行きましょう。今生でこう会えてうれしいです』その声はまことにおごそかであった。……私が、高橋先生がかつてインドで釈尊といわれた方であることを、はっきりと霊眼で見た時のなつかしさはそれ以上であった。『ブッダ、ブッダ……』といってひれ伏して泣いている私の髪に金の粉が降ってきた。私はそれには気づかなかったが、私が誘った宮崎の元『生長の家』の会員であった人から、『金が……』といわれて気がついた。なにもない空中から突然、金が降る。高橋先生の顔も、私の方にかざしておられたその手も、みな金である。その時思ったのは、釈尊の像を金箔で荘厳するのは、インドの時、お釈迦さまが説法をしておられると、空中から金が降ってきて、顔や手が金色に輝いたからであるということがわかった」。¹²⁾

この金粉現象は、関西本部における講演会でも生じたとされ、以下のように記されている。「それは先生の口から、額から、頭髮の毛穴から、また手の毛穴から、無数の金の微粉が出てきたのであります。……これは物質化現象と申しまして、金という固体が液体になりこれが気体となって先生の体の中に入る。そして、それがまた毛穴を通して、汗または唾液という液体となって体外に出てきてもとの固体になり金となるのだそうです。この日この現象をまのあたり見せて頂いたのであります」。¹³⁾

又、観音寺住職村上有快は、以下のように記している。「恩師は釈迦の再来であることは分かっていたが、ご自分からそれを言葉で釈迦だとは言わなかった。しかし、それらの裏付けは、著書を見ても、言動によっても満ちあ

12) 園頭広周『現代の釈尊高橋信次師とともに』正法会出版部、1984年、38—39頁。

13) GLA 関西本部編集部編『高橋信次講演集』GLA 関西本部事務局、1975年、11頁。

ふれている。また、釈迦でなければ出来得ないことが数限りなく、現象を以って実証されている。……恩師の体から金砂や金塊が出て来る物質化現象が起ったのだ。それが一度や二度ではない。50グラムもある金塊が口の中から飛び出した。その時余りの高熱で、手に持っていられない程だった。講演中まさに獅子吼されておられる時に口中より金粉が飛び散ったり、汗が乾くとその汗が金に変わってくるのである。この事実は多くの人びとの髪の中や着物や洋服に付着したことで証明されている。また、恩師の著書にも出てくるが、栃木県出流山の研修で、他教団の人びとがスパイしていたが、その二人の心を見抜き、教祖の心中まで読みとってしまった。しかし、これらのことは恩師にとって余り珍しい現象ではない。」¹⁴⁾

なお、筆者が接した信次生前からの GLA の会員はすべて、この金粉現象を目撃したと言う。しかし、この現象は、他の教団においても生じるとされており、信次のみにみられるとされる現象ではない。

園頭は、信次は、釈迦がもっていたとされる、天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏尽通の六神通を持っていたとして以下のように記している。「私が正師を信じた最初は、私がはじめて正師の前に坐った時、私がこの世に生まれてからその時まで、なにをし、なにを考えてきたかをすべて知っておられたからであった。正師が個人指導される場合は、その人が一番秘密にしていって人に知られたくないと思っている出来事を、『あなたは何年何月何日、こういうことがありましたね』と指摘して、私には嘘は通じませんよと知らして置いてから指導された。」¹⁵⁾

以上の園頭の言も、筆者が接したほぼすべての会員が肯定している。したがって、信次は、会員により強い霊能力を持つ存在であると信じられていたことが分かる。

なお、信次は、みずから釈迦であるとは明言しなかったが、講演や霊道を

14) 村上有快『調和への道』観音寺出版局、1985年、201—202頁。

15) 園頭広周『前掲書』94頁。

開く際に、インドではどうしたという発言をよくし、釈迦であるとの自覚をもっていたようである。そして、霊道を開いた人の多くは、信次に「ブッダー」と言って語りかけるケースが多かった。

さらに、信次には、4冊からなる『人間・釈迦』という著書があるが、これは、資料を一切用いず、筆の向くままに記述したという。すなわち、信次の眼前に、当時の模様や情景が映し出されるのを、霊的な示唆と手の動きにしたがって書いたものとされる。この事実も、信次が釈迦の再誕であることの証拠の一つとされている。

なお、ゴードマ・シッタルダーの生命は、本体がゴードマ・シッタルダーで、分身は不空三蔵・天台智顗・伝教・空教・木戸孝允であるとされる。ゴードマ・シッタルダーの分身は、ゴードマの前に、中インドに王様の子供として生まれている。さらに、ゴードマの前の生命は、リエント・アール・クラードと呼ばれ、南米のアンデス山脈の麓に生まれている。さらにその前の生命は、アトランテス帝国時代に、アガシャー大王として、神理を説いた人であったとされる。¹⁶⁾

生前みずから釈迦であるとは言明しなかった信次は、1976年3月の白浜の研修会において、自己をエル・ランティーであるとした。これは、白浜の覚りとされているが、その内容は、GLA 誌の「太陽系霊団の系図」によって知ることができる。¹⁷⁾ それによれば、信次は、大宇宙大神霊のもとにあるエル・ランティー（真のメシア）であるとされる。そして、アガシャー系（イエス）、カンターレ系（釈迦）、モーゼ系（モーゼ）は、エル・ランティーの光の分霊であり、ミカエルは、如来界の天使長であり、真のメシアの助力者であり、ガブリエル・ウリエル・サリエル・ラグエル・パヌエル・ラファエルの長であるとされる。

エル・ランティーは、霊太陽として、太陽のようなエネルギーの塊りであ

16) 高橋信次『心の発見科学篇』三宝出版株式会社、1984年、196—197頁。

17) 「GLA 第6巻第7号」三宝出版株式会社、1976年、15—18頁。

り、その光がプリズムを通すと七色の光に変化する。七大天使は、七色の色がそれぞれ人格を持った姿であり、その長が七色の翼を持つ大天使ミカエルである。ミカエル天使長は、如来界と宇宙界をつなぐ光の直系である。大天使は、大指導霊であり、あの世、この世を通して、エル・ランティーの力の直系として、人びとを導き、魂の進化に力をつくしている。

アラーは、エル・ランティーの当時の別名である。イエスは、エル・ランティーを指してエホバと呼び、アガチャー系を形作っている。ブッダは、ブラフマンと呼び、カンターレ系を作っており、モーゼは、ヤハヴェーと呼び、モーゼ系を作っている。

地上人類は、この三つの系列のどれかに属し、イエス・ブッダ・モーゼを頂点に、ピラミッド型を示し、末広がりになっている。そして、各人の霊子線は、すべて神の光に直結しており、霊的には大天使を通してつながる。現代文化の源流は、現証（モーゼ）、理証（イエス）、文証（ブッダ）による正法の確立にあった。しかし、その背後には、エル・ランティーの光があり、それなくしては、ユダヤ教・キリスト教・仏教は実現しえなかった。

高橋信次の高次元の名がエル・ランティーであり、師が説いた正法は、中道を軸に、慈悲と愛の調和のリズムにより生きることが教え、この神理は、大宇宙が存在し、人間が生存するかぎり不変なものとされる。

このように、信次が死ぬまぎわに明らかにした「太陽系霊団の系図」は、いかなる経過によって成立したか明らかでない。しかし、信次が、高橋佳子を後継者としようとしたことは、ほぼ確実である。信次の死後佳子は、大天使ミカエルとして、信次の「法の後継者」とであると位置づけられた。

園頭によれば、信次の死後、昭和52年3月5日、はじめて最高首脳者会議が開かれた。その席において、佳子は、以下のような「ミカエル宣言」をしたとされる。¹⁸⁾

18) 園頭広周『前掲書』50頁。

「あなた方は高橋先生が亡くなられた直後なぜすぐ私を主宰として立てなかったのですか。わたしは大天子ミカエルである。神はミカエルにこの世界を委されたのである。

1. 釈迦・キリストは人類が幸福になる道を説かなかった。
2. 仏教・キリスト教はローカル宗教であって世界宗教ではない。
3. ミカエルは、釈迦・キリストも説かれたことのなかった法を説くのである。
4. 釈迦・キリストを指導したのが、わたくしミカエルである。
5. 仏教なんてつまらない。仏陀の智慧っておかしい。聖書にはちっとも真理が書かれていない。
6. 高橋信次先生の教えも必要はない。
7. ミカエルに波動を合わせなさい。あと5年後には、全世界の人類はみなわたくしミカエルの前にひざまずくのである。ミカエルに誓わないものは救われません。」

上記の諸事項に対して、筆者は未だ十分な確認をしていないのであるが、以下の宣言は、佳子の書いたとされる三部作『真創世記』に記されている。¹⁹⁾

ミカエルの宣言

天上より出でて 世界に散らばりし、
多くの天使たちは
やがて至るべき日のために
私のもとへ結集して来るであろう
それはもはや さほど遠き未来のことではなく
この数十年の間に 徐々に成されいくことなのである
私のもとへ集い来り 語られる天使たちの普遍的神理は
やがて久遠の法となり形づくられていくのである

19) 高橋佳子『真創世記地獄編』祥伝社、1983年、12—13頁。

地上に出でたるあまたの天使たちよ
ともに光あるあかつきの日のために
己れをみがき 日々精進し道をきわめよう
己れの心に忠実に 他人に寛容に ともに歩みよう
見えない網の目のような糸が もうすでにはりめぐらされている
その糸を確実にたぐって
集い来らねばならない
この世に偶然なるものはないのだ
すべては神のみ心のままに
長き転生の中に結びきたる友よ
己れに気づき 立ちあがらねばならない

高橋佳子は、ミカエルとして、信次と一体であるとされ、さらには、信次は、法の種をまき、ミカエルをこの地上界に送り出すことが、48年間肉を持った目的であるとまでされた。²⁰⁾ さらに信次が死ぬ前に、自分がこれ以上地上界にとどまれば、ミカエルの役割まで侵害してしまうと語ったとされる。

ミカエルは、主エル・ランティーの心臓部・頭脳部であり、非常に静かな、法として存在しているのがエル・ランティー。その意をうけて、実際に具現するのがミカエルの役である。神と主エル・ランティーとミカエル大天使は三位一体である。信次の悟りが土台となって、そこから佳子の悟りが発展されていくという一貫した流れの中で、ミカエルが立つとき具現化が生じ、ものごとの本質が現われてくる。

ミカエルがこの世に肉体をもって姿をあらわす周期は、三億六千五百万年とされ、イエス・モーゼ・釈迦は、ミカエルが最終ユートピアをつくるための露払いとして出てきた大指導霊であるとされる。ミカエル・佳子は信次と同様に雨・風のような天候をも自由に変えることができる存在とされ、さら

20) 以下のミカエルに関する論述は、主として、「ミカエル1977・8」GLA 総合本部出版局、1977年。「GLA 1977・9」GLA 総合本部出版局、1977年による。

に、信次が伊豆の海岸でイルカと話をしたのと同じく、佳子の愛の波動は、動物たちにも伝わるとされる。数年前より、GLA 誌においても、ミカエル・佳子という名称はなくなり、高橋佳子となっているが、GLA 総合本部の会員の多くは、佳子をミカエルとみなしているとされる。講演会の時などに佳子と握手する者は、エネルギーがもらえるとされ、会員は争って握手をもとめる。現在でも会員のかなりの部分が霊能に対する指向を有しており、佳子はその持主として、憧れの的とされている。

5

高橋信次は、日本の多くの新宗教の教祖と同様にシャーマンの要素を有している。彼はエクスタシー＝脱魂（魂の旅）とポゼッション＝憑霊（霊の憑依）の両方を兼備した霊能者である。²¹⁾ 又、召命型か修行型かという分類においては、召命型の要素の方が強いとみなされる。そのためか、信次は、修行型の霊能者に対し否定的態度をとることが多い。

信次は、講演の後で、霊道を開くといって異言を語らせ、過去世を思いださせるか、憑依霊をとり去るかした。これは、いわばカリスマの証明とみなすことができる。これらの信次の行為がどれだけ日本の伝統的宗教の枠におさまるか、未だ筆者は十分な解明ができない状態にある。しかし、信次のカリスマは、単なる呪的カリスマではないと言えよう。

信次は、多くの著書を出版しており、その中で自己の教理を展開している。それらをみると、日本人の伝統的霊魂観を前提としている部分も多いが、そこにとどまてはいない。とくに、祖先崇拝に関しては、子孫が調和ある生活をするのがなによりの先祖供養としている点注目すべきものがある。霊友会系の瑞法会教団の、二代教祖が信次の著書を読むことにより、教団ごとG

21) 佐々木宏幹『シャーマニズム—エクスタシーと憑霊の文化—』中央公論社、1980年、35頁。信次は、地球上のどこにも自由に行くことができ、講演の際には、シャカ・イエス・モーズが、時に応じて入るとされている。

LAに帰依したのも重要な事象と言えよう。先祖供養と親孝行が中心の教団が、信次の著書を所与の教典となすに至ったのである。又、易や占いも乗越えなければならないと主張する点なども考慮の対象となる。

なお、信次から長女佳子への後継者決定に関しては、ウェーバーの理論における、カリスマ的資格をもつものを指名する項があてはまる。ミカエル・佳子は、カリスマの保持者である信次により後継者として指定され、さらに、一定のカリスマ性を有している若手を中心とする講師達によって、積極的な支持を受けた。さらに教義上は別な位置づけであるが、実際には信次の長女であるから、カリスマ的資格は血の中にあるという観念にもとづく世襲カリスマの要素も否定できない。日本では、PL教団のおしえ親が、官職カリスマとしての教義づけがなされている数少ない例であるが、そこでも実際上は、世襲カリスマの要素がある。日本においては、教祖の家族は、聖家族の色彩をおび、いわば小天皇家的存在とみなされる場合が多いと言えよう。そして、GLAもその例外ではなかったのである。

信次の死後、GLAは、多くの集団に分裂し、現在教勢はあまりふるわない。このように結果が生じるには、いくつかの要因があげられる。まず指摘しなければならない事項としては、信次が教団形成後短期間のうちに夭折したことがあげられる。そのために十分な教団づくりがなされていなかったのである。かつ、霊道が開かれることにより、霊能を身につけた多くの弟子を十分コントロールする体制が確立していなかった。真如苑の成功の要因の一つとしては、多くの霊能者を管理するシステムを確立したことがあげられるが、これに対しGLAは対照的であったと言える。信次が存命中は、彼のカリスマにより教団は統合されていた。しかし、その死後は講師の対立が生じ年輩の講師の多くは、それぞれ一派を立てて、小教祖となるに至った。

さらに、後継者である佳子が当時女子大生という若さであった事もマイナスの要因としてあげられる。佳子は、霊能を持つと会員に信じられており、一定のカリスマ性を有していた。しかし、若い講師たちのカリスマの演出に

反感を感じた会員は教団を去るに至った。他の多くの教団においても、後継者決定時においては、さまざまな演出が試みられる場合が多い。しかし、GLA においては、マスコミを利用しようとして反対にマスコミの追求にあうという事態も生じ十分な成功をおさめるにいたらなかった。

このように、高橋信次という巨大なカリスマの生と死は、いくつかの帰結をもたらした。その存在は、よりほりさげた分析の対象となる価値を有していると言えよう。

付記(当小論を書くにあたっては、対馬路人関西学院大学助教授、西山茂東洋大学助教授、島蘭進東京外国語大学専任講師の指導と示唆を受けた。これらの人に対し心から謝意を表したいと思う。)